

炎上の発信萎縮効果と炎上参加者の特性

How much Internet flaming discourages public speeches

田中辰雄¹
Tatsuo TANAKA

¹ 慶應義塾大学経済学部 Keio University, Faculty of Economics

Abstract One of the social cost of the internet flamings (“enjyou”) is to discourage speeches in the cyberspace. This paper estimated this cost using internet user survey and found that 15%~20% of SNS users put some restrains on their speeches in the internet. We also found that number of participants to the flaming was very low, that is, under 1% of internet users. Frequently participants have peculiar characteristics.

キーワード 炎上, インターネット, 言論

1. はじめに

炎上とはインターネット上で人・企業等に対し多くの批判コメントが殺到することである。炎上には企業や権力の不祥事をあばき規律を促すというプラスの側面もあるが、マイナス面も無視できない。マイナス面のうち特に炎上を恐れて人々が情報発信を控えるという萎縮効果は重要である。自由と民主主義のためにはできるだけ多くの人々が意見表明を行い、多様な議論が行われることが望ましいのに、それが阻害されてしまうからである。

本稿ではこの萎縮効果がどれくらいあるかをアンケート調査で大雑把に推定する。また、同じくアンケート調査で、炎上で批判コメントを書き込むいわば“攻撃者”はどれくらいいて、どのような人であるかも検討する。結論として、炎上があるために情報発信に何らかの抑制を加えている人はSNSユーザの15%~20%くらいになる。これに対して炎上に参加する攻撃者は1%以下であり、とくに情報発信の抑制を引き起こす攻撃的な人はゼロコンマ以下のパーセンテージでしかない。

2. データ

インターネット調査会社のモニターへのアンケート調査を用いる。調査時点は2016年6月で、40504人に予備調査を行い、炎上に直接かかわったかどうか、炎上についてどう思っているかを尋ねた。第二段階として炎上に直接関与した人を攻撃側・被害側ともに集めるだけ集め、比較のために炎上に関わりのない一般ユーザをほぼ同数ランダムで集めて本調査を行い、詳細アンケートを実施した。

具体的には炎上事件で書き込んだことのある人・拡散したことのある人・炎上の被害者になったことのある人・友人が炎上の被害にあうのを見たことがある人をすべてあつめ960人のサンプルを得た。これが炎上関与者となる。一方、炎上に関わらなかった人をランダムで1057人選び、一般ユーザと呼ぶことにする。炎上関与者・一般ユーザあわせて2017人をサンプルとした。調査会社はマイボイス社である。

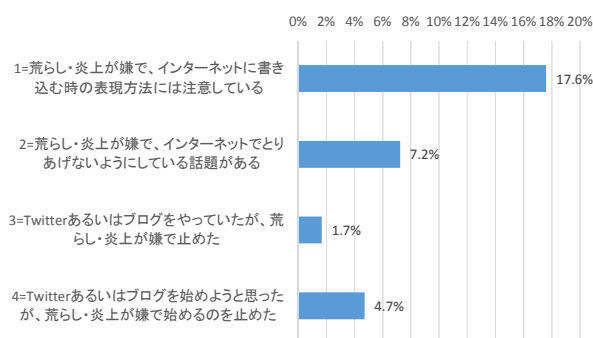
3. 萎縮効果

萎縮とは炎上を恐れて意見表明を抑制してしまうことをさす。この大きさを推測するため、まず、予備調査の段階で、炎上への防御的行動を4つあげて、自分にあてはまるものを選んでもらった。図1がその結果である。もっとも多いのは炎上しないように表現に気をつけるという項目で17.6%になる。ただし表現に気をつけるだけなら萎縮効果ではない。萎縮効果にあたるのは残り3つで、意図的に取り上げないようにしている話題があるという人が7.2%、炎上が嫌でブログ・Twitterを止めた人が1.7%、炎上が嫌でブログ・Twitterを始めるのを止めた人が4.7%いる。これら3つはいずれも炎上を恐れて情報発信を抑制しており、萎縮効果が働いていると考えられる。この3つのどれかに当てはまる人は12.7%になり、1割強の人が炎上が嫌で情報発信を何らかの形で抑制していることになる。

さらにこの図1は予備調査段階のすべてのサンプルなので、そもそもSNSをやらず、ネットへの書き込みも行わないユーザも含んでいる。本調査でSNSユーザだけに限って同じグラフを描くと情報発信を抑制する人は2割弱に増加する。すなわちSNSユーザを分母にすると2割弱の人に何らかの萎縮効果が働いている。

図1

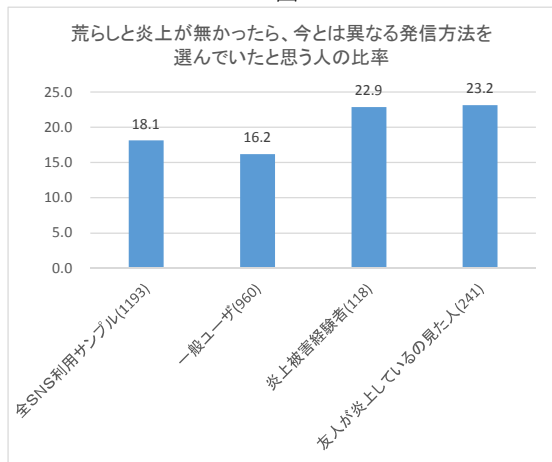
あなたに当てはまるものをすべて選んでください(n=40504)。



もうひとつの推定方法として、本調査のサンプル中の SNS ユーザ (1193 人) に対し、炎上・荒らしが無かったら、今使っている SNS を選んだかどうかを尋ねた。図 2 がその結果である。一般ユーザで 16.2% の人が炎上が無ければ今とは異なる SNS を選んでいたと答えている。

以上を踏まえると、インターネットで情報発信を行う SNS ユーザを分母にとると、そのうち 15% から 20% 程度の人が、炎上のために何らかの形で情報発信を抑制していると推測できる。SNS のユーザ数の推定は各種あるが平均的な数字として仮に 5000 万人とした場合、700 万~1000 万人の人が情報発信を抑制している計算になる。自由と民主主義にとってこれは大きなコストであるだろう。

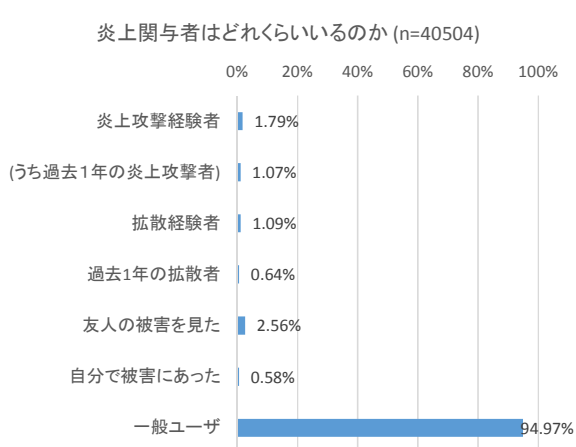
図 2



4. 炎上攻撃者の数

炎上を引き起こす攻撃者はどれくらいいるのだろうか。予備調査で見ると、炎上事件で書き込みを行う攻撃者の数は少ない。図 3 は 4 万人への予備調査での炎上関与者の比率をだしたものである

図 3

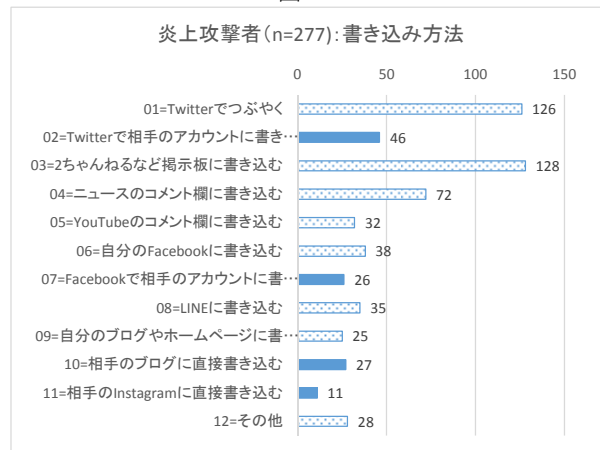


炎上で批判的なコメントを書く人、すなわち攻撃の

経験がある人は 1.79%しかいない。¹ 過去 1 年以内に炎上にコメントを書いたことがある人、いわば現役の攻撃者に限ると 1.07%にとどまる。この 1.07%、実数にして 434 人の中で本調査に応じてくれたのは 227 人で、この人たちについてさらに詳しく見てみよう。

炎上事件で萎縮が起こる一つの理由は本人に直接批判コメントが殺到するからである。本人が直接見るわけではない掲示板での書き込みや、twitter で一人で誰に言うでもなくつぶやくだけであれば相手に直接脅威を与えないので萎縮効果は少なく、またそれはそもそも自由社会での普通の意見表明であり特段の問題はない。炎上が問題になるのは当事者に直接コメントをぶつける点にある。そこでこの 227 人にどのようにコメントするかを尋ねた。過去に 1 回でも行ったことのある書き込み方法をすべて選んでもらった結果が図 4 である。

図 4



Twitter で一人でつぶやくこと、ならびに 2 チャンネル等の掲示板に書き込むことが 2 大書き込み手段である。黒い棒が直接相手にコメントを書き込む場合であるが、図からわかるように直接書き込んだことのある人は限られる。直接書き込みを一回も行ったことのない人が 76%に達し、過去 1 回でも行ったことがある人は 24.2% (67 人) にとどまる。さらに 24.2%は過去に一回でも直接書き込みをしたことがある人なので、ある一つの炎上事件での直接攻撃者の比率としては過大である。通常は、まずは自分をつぶやくなど当事者が見えないところで発言し、怒りや義憤が嵩じてくると相手に直接にコメントを送ることになると考えられるからである。一つの炎上事件での直接攻撃者の比率はもっと低いはずで、この数字はいわば上限となる。

もう一つ、炎上事件で重要なのは書き込みの頻度である。炎上事件では一人の人がたくさんのコメントを書き込み、これが圧力になることが多い。² そこで

¹ この数字は田中・山口(2016)が 2014 年に行った調査で得た 1.5%という数字とほぼ同じである。

² たとえばジャーナリストの上杉隆氏は自身のブログが炎上して 700 件の批判コメントがついたとき、それを書いたのがたった 4 人だったと述べている。

書き込みの頻度を尋ねた。過去1年で何件の炎上事件に書き込んだか、また過去1年のなかで1件の炎上に書き込んだ回数は最高で何回かを問うた。両者をクロスして人数を書いたのが表1である。

表1

それらのなかで、一つの炎上事件で書き込んだ回数は最大でどれくらいでしょうか？Twitterならつぶやきの回数、ブログや掲示板、ニュースへのコメントなら投稿の回数でお答えください。

過去1年に何件の炎上事件に書き込みましたか。	1回	2~3回	4~6回	7~10回	11~20回	21~30回	31回~50回	51回以上	
1件	78	9	1	1					89
2~3件	15	59	16	3		1			95
4~6件	2	14	12	8	2	1		1	40
7~10件	0	6	4	5	4	6			25
11件以上	3	6	3	4	2	3		7	28
	98	94	36	21	8	11	0	9	277

過去1年に参加した炎上件数では1件と2~3件がもっとも多く、このふたつで6割以上を占める。炎上一件あたりの最高書き込み回数でも1回と2~3回であわせて7割近い。つまり、ほとんどの人は年に2~3件の炎上事件に一言か二言書き込むだけということになる。炎上事件で当事者を追い込むのはそのようなカジュアルな攻撃ではなく、一方的で執拗な攻撃であり、その実行者はこの表の右下の人達であるが、それは数としてはわずかである。たとえば年に11回以上書き込む人は28人しかいない。

特にこの表1の右隅の7人は注目に値する。7人は年に11件以上の炎上事件に書き込み、また過去の最高書き込み回数が50回以上にもなる。炎上事件の主役になる人はこの人々である。予備調査に換算するために人数を1.57倍(=434/277)し、そのうえで出現頻度を出すと以下の表2ように0.027%となる。

表2

	人数	予備調査内での出現頻度
過去1年に炎上に書き込んだ	277	1.071%
うち直接書き込み経験あり	67	0.259%
うち1年に11件以上炎上事件に書き込んだ	28	0.108%
うち11件かつ最大書き込み回数が50回以上	7	0.027%

5. 炎上攻撃者の性格

炎上で書き込みを行う攻撃者はどのような人なのだろうか。性格を語る16の項目を用意して自分にあてはまるものを選んでもらった。対象は本調査の2017人である。

表3

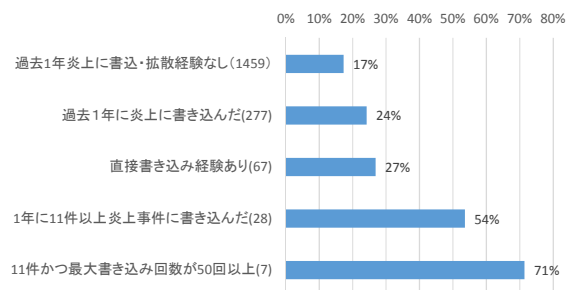
01=喧嘩をした時、自分から謝ることが多い	<input type="radio"/>
02=世の中は根本的に間違っていると思う	<input type="radio"/>
03=自分は周りの人に理解されていないと思う	<input type="radio"/>
04=ずるい奴がのさばるのが世の中だと思う	<input type="radio"/>
05=努力は報われないものだと思う	<input type="radio"/>
06=自分をもっと評価されてしかるべきだ	<input type="radio"/>
07=これまでの人生で出会った人の中には感謝している	<input type="radio"/>
08=相手の意見が間違っているなら、どこまでも主張して相手を言い負かしたい	<input type="radio"/>
09=人と話していて、ひょっとして自分の意見が間違っているのではと思うことがしばしばある	<input type="radio"/>
10=会社や役所の偉い人たちは自分の利益しか考えていないと思う	<input type="radio"/>
11=自分と異なる意見の人からこそ学ぶことが多いと思う	<input type="radio"/>
12=人から怖いと言われることがある	<input type="radio"/>
13=人からお人よしと言われることがある	<input type="radio"/>
14=悪いことをやった人でも、黙ったら許してやるべきと思う	<input type="radio"/>
15=罪を犯した人は世の表舞台から退場すべきだ	<input type="radio"/>
16=これまでの人生で自分を陥れた人がある	<input type="radio"/>

16項目の中から炎上攻撃者と有意に関連するものを選び出した。表3で○をつけたものが有意な相関があったものである。相関があった項目を見ると、「ずるい奴がのさばるのが世の中だと思う」「努力は報われないものだと思う」「これまでの人生で自分を陥れた人がある」など世の中への否定的な気持ちが強い。また、「罪を犯した人は世の表舞台から退場すべきだ」「相手の意見が間違っているなら、どこまでも主張して相手を言い負かしたい」など、相手を責める攻撃的な気質が強いことがうかがわれる。

炎上攻撃者を前節で行った分類に分けると、萎縮効果を発揮させるような攻撃的な人ほどこれら属性が強まる。一例として、「罪を犯した人は世の表舞台から退場すべきだ」のときを図示したのが図5である。

図5

「罪を犯した人は世の表舞台から退場すべきだ」と思う人の割合



炎上事件で攻撃・拡散に参加していない人では退場すべきだと思う人は17%である。過去1年に炎上に書き込んだ人では24%に増加する。相手への直接書き込みの経験ありの人では27%に、1年に11件以上炎上に参加する人では54%に増え、最後に最高書き込み回数が50回を超える例の7人になると71%になる。最後の71%はサンプル数が7で統計処理をするには難がある。ただし、表3で有意になった他の項目すべてで図5と同じパターンが見出されるので、偶然とは考えにくい。炎上事件の攻撃者は世の中に否定的な感情を持ち、攻撃的な気質の強い人と考えられる。

6. 要約と含意

本稿の内容を要約する。炎上は人々の情報発信を萎縮させる。炎上・荒らしがあるためにSNS選択を変える、あるいは話題を限定するなど情報発信に抑制を加える人は、SNS利用者の15~20%程度はいると推測され、かなりの数になる。これに対し炎上をおこす攻撃者は1%以下と少なく、特に相手に直接コメントを投げ何度も繰り返し攻撃を行って、情報発信を萎縮させる人はゼロコンマ以下のパーセンテージである。彼らは性格はやや特異のようである。

何人にも言論の自由はあるので、炎上事件の攻撃者が意見を述べる自由は確保されねばならない。しかし、ゼロコンマ以下の人のために15%を超える人が発言を抑制しているとすれば、自由と民主主義にとって望ま

しい状態ではないだろう。言論の自由を守りながら、
情報発信の萎縮を防ぐような工夫が望まれる。

参考文献

- 1) 田中辰雄・山口真一（2016）『ネット炎上の研究』勁草
書房